

# 向き合う



今は30歳を超えた次男は生まれた時から脂漏性湿疹がひどく、生後2カ月頃には全身から浸出液が滴るアトピー性皮膚炎になった。その後、食物アレルギー、ぜん息、鼻炎・結膜炎を次々に発症する「アレルギーマーチ」をたどった。

「誰がアレルギー体質にしたのか」。周囲の言葉に傷つきながら必死に子育てに取り組んだ。ぜん息発作で夜間救急を受診するのも日課になった。小学校に入ると症状が重く登校できない日は年40日にも及んだ。中

## アレルギーを考える 園部 まり子さん ① 母の会代表理事

でも目の症状は受診していても悪化の一途をたどった。

8歳の時に転機が訪れる。横浜市にあったアレルギーセンターで横浜市立大に眼アレルギー専門医がいることを知り、わらにもすがる思いで受診した。やっと出会えた専門医から「春季カタル」という初めて聞く疾患の説明を受け、片目は失明寸前であることも分かった。

炎症を抑えるため点眼、内服ともに強いステロイド薬を使う。「診察のたびにしっかりと作用をチェックします」との丁寧な説明を受け不安は消えた。経口投与は半年かけて減量し、1年で失明の危機を乗り越えて視力は1・2まで回復した。診療科の連携で命を脅かしていたアレルギーも突き止められた。

体調が悪い時に学校の掃除でゴム手袋をはめたとたん手先から全身にじんましんが広がって先生を驚かせた。1週間後には風船を膨らませると胸にパッと

## 次男にアレルギーマーチ

赤い発疹が出た。そのエピソードを基に皮膚科で検査したところ、当時小児では報告例がなかった強いラテックスマレルギーであることが分かった。

含まれるタンパク質の構造が似ているナッツ類や果物、ゴマなどにも強く反応する。主治医は「誰が何と言っても食べなかつた君の判断が正しかった。だから今生きている」と子どもの頭をなでてくれ、親子で泣いた。次男は強いアレルギーはあっても普通の生活を送れるようになっていった。「患者も正しく病気を理解しなければいけない」。体験を通じて得た思いをもとに1999年8月、夜間救急で知り合ったお母さんたち10人で会をスタートさせた。

そのべ・まりこ 文部科学省、厚生労働省、内閣府、消費者庁の検討会委員、日本小児アレルギー学会の各疾患ガイドライン作成委員などを務める。会として第69回「保健文化賞」などを受賞。